監修　佐佐木信綱　新村出　津田左右吉
辻善之助　山田孝雄　和辻哲郎

今昔物語　四

長野嘗一校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

監修　佐佐木信綱　新村出　津田左右吉
辻善之助　山田孝雄　和辻哲郎

今昔物語　四

長野嘗一校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書第六十七回配本
「今昔物語」五　長野嘗一校註
昭和三十年三月三十一日初版發行
印刷所　凸版印刷株式會社
發行所　朝日新聞社（東京都千
代田區有樂町・大阪市北區
中之島・小倉市砂津）
定價　三〇〇圓

目次

凡例……三
本文……七
巻二十　本朝付佛法……七
天竺の天狗海水の音を聞きてこの朝に渡るものがたり　第一……七
震旦の天狗智羅永壽この朝に渡るものがたり　第二……九
天狗佛と現じて木末に坐せるものがたり　第三……一六
天狗を祭る僧内裏にまゐりて現に追はるるものがたり　第四……一八
仁和寺の成典僧正尼天狗にあふものがたり　第五……二一
佛眼寺の仁照阿闍梨の房に天狗につかれたる女來たるものがたり　第六……二二
染殿の后天狗のために嬈亂せらるるものがたり　第七……二六
良源僧正靈となり觀音院に來りて餘慶僧正を伏するものがたり　第八（本文缺）……三一
天狗を祭る法師、男にこの術を習はしめむと擬するものがたり　第九……三二
陽成院の御代に瀧口金の使に行き外術を習ふものがたり　第十……三六
龍王天狗のために取らるるものがたり　第十一……四三
伊吹山の三修禪師天狗の迎へを得るものがたり　第十二……四七
愛宕護山の聖人野猪に謀らるるものがたり　第十三……五〇

野干人の形と變じて僧を請じて講師となすものがたり　第十四（本文缺）……五三
攝津國の牛を殺す人放生の力によりて冥途より還るものがたり　第十五……五三
豐前國の膳の廣國冥途に行きて歸り來るものがたり　第十六……五六
讚岐國の人冥途に行きて還り來るものがたり　第十七……六〇
讚岐國の女冥途に行きその魂還りて他の身に付くものがたり　第十八……六三
橘磐島使を賂ひて冥途に至らざるものがたり　第十九……六六
延興寺の僧惠勝惡業によりて牛の身を受くるものがたり　第二十……六九
武藏國の大伴赤麿惡業によりて牛の身を受くるものがたり　第廿一……七一
紀伊國名草郡の人惡業を造りて牛の身を受くるものがたり　第廿二……七三
比叡山の横川の僧小虵の身を受くるものがたり　第廿三……七四
奈良の馬庭山寺の僧邪見によりて虵の身を受くるものがたり　第廿四……七七
古京の人乞食を打ちて現報を感ずるものがたり　第廿五……七九
白髮部猪麿乞食の鉢を打ち破りて現報を感ずるものがたり　第廿六……八〇
長屋親王沙彌を罰ちて現報を感ずるものがたり　第廿七……八一
大和國の人兎を捕へて現報を感ずるものがたり　第廿八……八三
河內國の人馬を殺して現報を得るものがたり　第廿九……八四
和泉國の人鳥の卵を燒き食ひて現報を得るものがたり　第三十……八五
大和國の人母のために不孝なるによりて現報を得るものがたり　第卅一……八七
古京の女母のために不孝なるによりて現報を感ずるものがたり　第卅二……八九
吉志火麿母を殺さむと擬して現報を得忽ち死するものがたり　第卅三……九〇
出雲寺の別當淨覺父の鯰となりし肉を食ひ現報を得て忽ち死するものがたり　第卅四……九三
比叡山の僧心懷嫉妬によりて現報を感ずる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ものがたり　第卅五……九六
河内守慳貪によりて現報を感ずるものがたり　第卅六……一〇〇
財に恥り娘を鬼のために喰はれて悔ゆるものがたり　第卅七……一〇四
石川沙彌惡業を造りて現報を感ずるものがたり　第卅八……一〇六
清瀧河の奥の聖人慢りをなして悔ゆるものがたり　第卅九……一〇七
義紹院化人と知らず、施しを返され悔ゆるものがたり　第四十……一一〇
高市中納言正直によりて天神を感ぜしむるものがたり　第四十一……一一三
女人心風流なるによりて感應を得、仙となるものがたり　第四十二……一一三
勘文によりて左右の大將憤しむべくして枇杷の大臣憤しまざるものがたり　第四十三……一一四
下毛野敦行わが門より死人を出すものがたり　第四十四……一一六
小野篁情によりて西三條大臣を助くるものがたり　第四十五……一一九
能登寺直心によりて國をやすめ財を得るものがたり　第四十六……一二一
卷廿一（缺卷）……一二五
卷廿二　本朝……一二六
大織冠好めて藤原の姓を賜わるものがたり　第一……一二六
淡海公四家を繼ぐものがたり　第二……一三〇
房前の大臣北家を始むるものがたり　第三……一三一
內麿の大臣惡馬に乘るものがたり　第四……一三二
閑院の冬嗣右大臣幷びに子息のものがたり　第五……一三四
堀河の太政大臣基經のものがたり　第六……一三六
高藤內大臣のものがたり　第七……一三八
時平の大臣國經大納言の妻を取るものがたり　第八……一四六

卷廿三　本朝付大織冠……一五四
平維衡同じき致賴合戰して咎を蒙るものがたり　第十三……一五四
左衛門尉平致經明尊僧正を導くものがたり　第十四……一五五
陸奥前司橘則光人を切り殺すものがたり　第十五……一五九
駿河前司橘季通構へて逃ぐるものがたり　第十六……一六四
尾張國の女美濃狐を伏するものがたり　第十七……一六八
尾張國の女細疊を取り返すものがたり　第十八……一七〇
比叡山の實因僧都強力のものがたり　第十九……一七三
廣澤の寬朝僧正強力のものがたり　第二十……一七五
大學の衆相撲人成村を試みるものがたり　第廿一……一七八
相撲人海恒世蛇に會ひて力を試みるものがたり　第廿二……一八三
相撲人私市宗平鰐を投げ上ぐるものがたり　第廿三……一八六
相撲人大井光遠の妹強力のものがたり　第廿四……一八九
相撲人成村常世勝負のものがたり　第廿五……一九二
兼時竪行競馬勝負のものがたり　第廿六……一九六

卷廿四　本朝付世俗……一九八
北邊の大臣と長谷雄中納言とのものがたり　第一……一九八
高陽親王人形を造りて田の中に立つるものがたり　第二……一九九
小野宮の大饗に九條大臣打衣を得るものがたり　第三……二〇一
爪の上に於いて勁敵を返す男、針を返す女のものがたり　第四……二〇三
百濟川成飛驒工と挑むものがたり　第五……二〇三
碁擲ち寬連碁擲ち女にあふものがたり　第六……二〇六

典藥寮に行きて病ひを治する女のものがたり　第七……二二一
女、醫師の家に行き瘠を治して逃ぐるものがたり　第八……二二三
蛇に嫁ぐ女を醫師治するものがたり　第九……二二八
震旦の僧長秀この朝に來りて醫師に仕はるるものがたり　第十……二三〇
忠明龍にあへる者を治するものがたり　第十一……二三二
雉忠人の家を見て瘠病あるを指すものがたり　第十二（缺文）……二三四
慈岳川人地神に追はるるものがたり　第十三……二三四
天文博士弓削是雄夢を占ふものがたり　第十四……二三八
賀茂忠行道を子保憲に傳ふるものがたり　第十五……二三一
安倍晴明忠行に隨ひて道を習ふものがたり　第十六……二三三
保憲晴明ともに覆物を占ふものがたり　第十七（缺文）……二三七
陰陽術を以て人を殺すものがたり　第十八……二三七
播磨國の陰陽師智德法師のものがたり　第十九……二四〇
人妻惡靈となりその害を除く陰陽師のものがたり　第二十……二四二
僧登照倒るる朱雀門を相するものがたり　第廿一……二四五
俊平入道の弟算の術を習ふものがたり　第廿二……二四八
源博雅朝臣會坂の盲のもとに行くものがたり　第廿三……二五三
玄象の琵琶鬼のために取らるるものがたり　第廿四……二五六
三善清行の宰相紀長谷雄と口論するものがたり　第廿五……二五八
村上天皇菅原文時と詩を作りたまふものがたり　第廿六……二六〇
大江朝綱の家の尼詩の讀みを直すものがたり　第廿七……二六一
天神御製の詩を人の夢に讀み示したまふものがたり　第廿八……二六四
藤原資業詩を作り義忠難ずるものがたり　第廿九……二六五
藤原爲時詩を作りて越前守に任ぜらるるも

のがたり　第三十……二六六
延喜の御屏風に伊勢の御息所和歌を讀むものがたり　第卅一……二六八
敦忠中納言南殿の櫻を和歌に讀むものがたり　第卅二……二七三
公任大納言屏風の和歌を讀むものがたり　第卅三……二七九
公任大納言白川の家に於いて和歌を讀むものがたり　第卅四……二七八
在原業平中將東の方に行きて和歌を讀むものがたり　第卅五……二八〇
在原業平右近の馬場に於いて女を見て和歌を讀むものがたり　第卅六……二八三
藤原實方朝臣陸奥國に於いて和歌を讀むものがたり　第卅七……二八五
藤原道信朝臣父を送りて和歌を讀むものがたり　第卅八……二八七
藤原義孝朝臣死にて後和歌を讀むものがたり　第卅九……二九三
圓融院の御葬送の夜朝光卿和歌を讀むものがたり　第四十……二九五
一條院失せたまひて後上東門院和歌を讀むものがたり　第四十一……二九六
朱雀院の女御失せたまひて後女房和歌を讀むものがたり　第四十二……二九七
土佐守紀貫之子死にて和歌を讀むものがたり　第四十三……二九八
安陪仲麿唐に於いて和歌を讀むものがたり　第四十四……二九九
小野篁隱岐國に流されし時和歌を讀むものがたり　第四十五……三〇〇
河原院に於いて歌讀ども來て和歌を讀むものがたり　第四十六……三〇一
伊勢御息所幼き時和歌を讀むものがたり　第四十七……三〇二
參河守大江定基送り來て和歌を讀むものがたり　第四十八……三〇三
七月十五日女叡を立てて和歌を讀むものがたり　第四十九……三〇四
筑前守源道濟の侍の妻最後に和歌を讀みて死するものがたり　第五十……三〇五
大江匡衡の妻赤染和歌を讀むものがたり　第五十一……三〇八
大江匡衡和琴を和歌に讀むものがたり　第

五十二……三一〇
祭主大中臣輔親朝臣公を和歌に讀むものがたり　第五十三……三一一
陽成院の御子元良親王和歌を讀むものがたり　第五十四……三一三
大隅國の郡司和歌を讀むものがたり　第五十五……三一五
播磨國の郡司の家の女和歌を讀むものがたり　第五十六……三一六
藤原惟規和歌を讀みて免さるるものがたり　第五十七……三一〇

今昔物語

長野嘗一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

凡例

一、本書の頭註は、註解と、本文の主要なる校訂より成る。

二、本書の本文は、芳賀矢一博士の攷證今昔物語集を底本とし、同所載の二本、鈴鹿三七氏藏本（新訂增補國史大系本に校合せられたものによる）丹鶴叢書本、東大國語研究室本、東大圖書館本、靜嘉堂文庫藏の諸本、內閣文庫藏の諸本、及び新訂增補國史大系本（そのなかに校合せられてゐる諸本をふくむ）等によつて校訂した。諸本の略號は左記によつた。

底本　芳賀博士攷證本

原本　右攷證本の底本となつた大學田中本（大正十二年大震災に燒失）

鈴鹿本　鈴鹿三七氏藏本

東大本　東大國語研究室本

他の諸本は、その數によつて「一本」「二本」等と略稱。

三、校註者の私意により改め補つた部分は、「意により云々」と記してある。

四、今昔物語には缺字が甚だ多い。「底本缺字」とあるは、底本でその部分が空白となつてゐて缺字たることを明示してあるもの。又、「底本缺」とあるは、空白がなく、缺字たることを明示してないものをさす。

五、目次と本文の題名との相違は、明らかに誤りとみなされるもの、及び他本によつて訂補できるものは、それに從つてなるべく一致させるやうにしたが、他はしばらくそのままにしておいた。

六、底本獨得の用字用語及び片假名雙記の書き方は、現在の讀者には分りにくいので、この全書編集の趣旨に從つて現代式（歴史的假名づかひ）にあらため、句讀を切り、「　」を附し、一切を讀み易いやうにした。但し、固有名詞はそのままとした。

七、各卷各篇の初めには、その卷、その篇についての綜合的批評ともいふべきもの、參考に資すべき事項等を、頭註欄に簡單に記した。その終りに「法華驗記上參照」などとあるのは、同一の說話もしくは類似の話柄が該書上卷に出てゐる、の意である。

八、今昔物語の註釋書は皆無といふも過言ではないので、本書の頭註は、校註者の最も意を注いだところである。難解な所、紛れ易い所は見のがさぬやう心がけ、どうしても分りかねる箇所は、「不詳」「不明」等、その旨を明記した。

九、本書刊行の順序を卷十一からにしたのは、「天竺震旦の部」は文學的に興味うすく　かたがた大册でも

あるので、まづは「本朝の部」を終へてからとの趣意に出たものである。その「本朝の部」も、巻二十までの「佛法の部」は、大半これまた興味うすく、今昔物語の名篇佳什は大部分が巻廿二以後にひそんでゐるのだが、全書の體裁もあり、ともかく巻十一から刊行することにしたのである。

十、なほ、詳細は、第一巻の凡例を参照されたい。

十一、故松田五十二氏舊藏、現在梅澤義一氏藏の「古本説話集」上下二巻は、昭和廿六年、吉田幸一氏によつて詳しくその内容が紹介されたが、（日本文學研究二三、二六號）校註者はそれを披見することができなかつた。今回、吉田氏の御好意により、同氏のもとにある轉寫本を借覽して寫すことができた。右は今昔物語と宇治拾遺物語との中間に成立したと目せられる古説話集で、兩書との間に重複する説話が多い。近く一誠堂から寫眞版で刊行の豫定ときくが、今回より、本全書の校註欄に關係事項を参考としてかかげた。吉田氏に厚く謝するとともに、その刊行が一日も速かならんことを祈つて止まない。

十二、今昔物語中の登場人物その他の固有名詞については、成立その他に關係あるもの、特に重要と思はれるもののほかは、これまであまり解説を施さなかつた。これも今回より、判明する限り、いちいち簡單な解説を加へ、その出典も明記した。但し、萬人に著名な人物（菅原道眞、藤原道長、同頼通等）のみは省略した。

十三、主なる引書用は、左記略稱に從つた。

分脈……尊卑分脈　分脈脱漏……續群書類從所載尊卑分脈脱漏　補任……公卿補任　紹運錄……本朝皇胤紹運錄　地名辭書……大日本地名辭書　○○氏系圖……類從本○○氏系圖

和名抄……倭名類聚鈔　名義抄……類聚名義抄　字類抄……伊呂波字類抄

今昔物語

巻二十

天竺の天狗海水の音を聞きてこの朝に渡るものがたり　第一

今は昔、天竺に天狗ありけり。天竺より震旦に渡りける道に、海の水一筋に、「諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅爲樂」と鳴りければ、天狗これを聞きて大いに驚きて、海の水いかでかやむごとなき甚深の法文をば唱ふべきぞ、と怪しび思ひて、この水の本體を知りて、いかでか妨げではあらむ、と思ひて、水の音につきて尋ね來るに、震旦に尋ね來て聞くに、なほ同じ樣に鳴る。

されば震旦も過ぎて、日本の境の海にして聞くに、なほ同じ樣に唱ふ。それより筑紫の波方の津を過ぎて、文字の關にして聞くに、いま少し高く唱ふ。天

(一)この巻、佛法の部の最後に位し、いはばその「雜の部」に相應する。内容雜然、しかしこの雜然たるものの中にこそ、今昔物語獨得の面白さがある。先づ、人間的な天狗の物語、次いで靈驗、轉生、因果應報譚とつづくが、その間には、染殿の后の物語、瀧口が怪しげな外術を習ふ物語など、異色ある數篇も混つてゐる。佛教説話群中では、最も興ある巻である。

(二)先進の大國、天竺や震旦の天狗が小國とあなどつて、わが國の佛法の妨げなさんと遙々來朝し、失敗して歸る、といふ筋は、次の第二話と同斷で、民族意識を見得る。天狗は佛法の妨げをなす力と考へられてゐた。

(三)印度から中國へ渡來する途中。

(四)一切の行ひは無常だ。生まれたものは必ず滅するといふ眞理にもとづくからだ。生じたり滅した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.